

1. 10年経てば山河も変わるが



夢だったので生きていた

喚き声で眠りから覚めてみると夜12時直前だった。女房がうつぶせになって唸りながら「アイゴ、アイゴ」と息も絶え絶えに叫び声を上げている。私は急病になったのか？と思い、一体どうしたのかと揺り起こした。聞いてみると、重たい物に体をはさまれ抜け出すことも出来ず、体を動かすことができなかったと言うのだ。私は安心した。先ず119番を呼ぶ必要がなくなり、生きていたのが現実なのだ。これが夢でなくてすべてが現実なら、死ぬことも生きることとも単純で、希望などはないのではないか！夢だったので幸いにも生きていたということ……これは難しいことに直面したときには「夢であることを願い」、幸福な場面では「現実であることを願う」ということ……欲望が大き過ぎず軽度なことが、夢と現実の間で失望が大きくならずに済むことになるのだ。万一、夢が現実であったとしたら重たい物体に押さえられて抜け出せず死んだらどうなっただろうか？と思うと、夢で幸せだったと考える。だが朝になって昨日の夜中にどんな夢を見てうなされていたのかと問うと、全く覚えていないと言う。人は毎日夢を見るが、目が覚めるとすべて忘れてしまうと言う言葉は合っているようだ。だが時折忘れてしまわず思い出すものが夢物語になる。幼い頃聞いた話だが、健康な人は夢を見ないと言う話を聞いた。夢を見ないと言うことは、夢を見て忘れてしまうということなのだ。病床に臥して悪夢ばかり見ると言うことも、こんなことから出て来た話だと考えても見る。

食べない方が良かった

昨日の夕方は、家族全員が夕食が欲しくないので食べないことにするというので、私も別に食べたくもないし、また食べるとしても私一人食べるのはご飯の味が良くなるわけでもないの、私も食べないと言った。だが夜中に腹が減り始めた。腹が減ると言うより口がひもじいのだ。一昨日の夕方は、昼食時に沢山食べたので夕食を食べなかったが、翌日腹が楽なのでなるべく夕食を欠食するのが良いと思ったが、昨日の夕方は昼食をはかばかしく食べてないから事情が違う。そのまま寝ていたらよいものを、酒でも一杯飲みたくなった。女房に肴を作ってくれと言うと、トンカツのおかずで肴の準備をしてくれた。私一人美味しく酒を何杯か飲んで眠ったが、明け方に起きるとやはり『食べない方が良かったのに』と独り言を言った。やはり腹の調子が良くないからだ。...

...最近色々な機関で何でも食べ漁って刑務所暮らしを送るとか、今でも引き続き機関から侮られている人がどんなに多いことか.....?こんなことはすべて食べなければ良いのに見境なく食べ漁ったせいで、晩年が滅茶苦茶になったざまではないか! 欲心を捨て忍耐力を持って生きて行けば、清潔な歴史を残せるのだ。

夫そして父親、父親そして祖父

夫が父親になり、父親が祖父になるとき、それは歳月が、朝鮮時代が日帝時代になり、日帝時代が現時代になるのと同じ話なのだ。祖父になり、今の父親に当たる人が話しているのを聞くと、我々が考えていることは、虎が煙草を吸っていた時節のような話だと思えて、頭から取り除いてしまう。孫や曾孫のような子供が、大勢の人がいる車中だとか公衆のいる場所で、他人に不便をかけるときも、子供の自由と、萎縮させないことを配慮して、子供を抑制することはない。公衆は完全に無視してしまっている児童教育法だ。私はテレビでの、家庭生活の労働分担に対して、夫婦間の専担だとか分担とかいった男女の討論で実証された気がして、テレビを消してしまった。このようなテレビでの討論なら、出演者の飛び切り優れた教養から秩序立ててじっくりと話をしてこそ聞き易いのに、一般の婦女子は、自分の方が優れているとばかりに、他人の話の途中で言い争いでもするかのようにまくし立てるのは聞き辛かった。あんな具合に子供を教育すれば、成長して利己主義となり、社会の癌のような存在になるのではないか?と思う。こう考えると.....テレビ討論で少しでも不利な話になると、「それは昔の話」だと口をつむぐ。何でもかでも、米国では.....という外国を真似る言い方で、わが国が早く先進国になることを望むのはよい方法ではない.....夫が父親になり、父親が祖父になって、世の中が大変な変わりようなので、虎が煙草*を吸っていた時節が嫌になって、煙草を止めてから久しい。

訳者注：韓国の童話では「むかし昔、虎が煙草を吸っていた時代.....」でよく始まる。

それがいい

碧松 洪スンラクさんの「私が死ぬ時は」という文章を読んで、私もやはりそんな考えを持ち支持する人間だ。どうして死の直前に会いたい人達を呼んでおき、会ってから死ぬ必要があるだろうか.....?平素健康なときしょっちゅう会い、会いたくない人には会わずに生きて行き、死ぬ時は誰も知らずに静かに死ぬのが良いと私は考えて生きている。更に、健康と言うのものは何時までも保障できるものなのか.....?分からないものだ。健康には自信がある、と死ぬ時まで信じることは出来ないのだ。急に重病に掛かるとか、自由にならない体になり、

*

何年も生きることになれば、死ぬ方がましなので、健康なときにみんな大いに会って、客観的にやつれ果てたと思ったら、隠居生活をするのが良いようだ。また、死ぬ前にやつれ果てた姿を子供以外には見せたくない気持ちでいる。このような考えは、有名な人士も老いて病気に掛かれば、錚々としていたその昔の印象が格下げになるためなのか……？とも考えてみる。いずれにせよ、なるに任せた凄惨な姿を他人に見せないようにするのが、生きている人の自尊心だから……と言うことだ。それだから健康を強調することになるのだ。

生まれるときは泣きながら死ぬ時は笑いながら行きましょう

この世の中が陰しく恐ろしいから、たった今生まれた赤ちゃんだけが泣きながら出て来たんだよ……嬉しくて泣きはしなかったんだ。笑いながら生まれたという話は聞いたことがありません。泣きもせず生まれた赤ちゃんもあったよ。だがそれは唾だったのだなあ。あの世の中で予め知った上で生まれてきたので、『何もいわずに生きて、帰ってこようとしたのかも分からないよ……』。泣きながら生まれた赤ちゃんが、腹が減って泣いて出て来たのなら、10ヶ月の間腹の中で食べる物をみんな食べつくして出て来たのかね……？ そんなことは話にならないよ。世の中の風波の難しさを経験しながら何十年を生きようとするなら、神の領域で保護を受けて世の中に出て来て、次は母親の保育の元に成長させなければならないことになり、その時から倍の難しさを背負うのが母親なのです。生まれたばかりの赤ん坊は何も知りません。徐々に成長し、この世の波を掻き分けながら長い歳月を送り、することも沢山成し遂げ、この世の中で功を立てれば、世の中に生まれて来て功を立てたことになります。そうして生きて行こうとすれば、人と人の間で葛藤もあり、助けてやりもしながら生きて行くことになります。助けてやったり助けられたり……と言う人間の貸借対照表を作ってみて、損害が出るように感じるなら、それは良いことをしたということです。いつでも損害ばかり受けて生きていくのは良いことをしたことです。この世の中には可哀想な人が大勢います。可哀想な人を助けながら、余ったもので生きていく人も大勢います。こんな不均衡となる人生といっても、そんな不均衡から生じる美しさが温かい人間関係として、あの世にある銀行で自動的に通帳に入金されているのです。そのようにあの世に入金されていくことを認識しながら行動すれば、あの世の悪い鬼神がそのお金を盗んで逃げ去ります。何も考えずただ善行をもって生きていけば心が安らかになり、希望が持てるようになり、あの世に行く道が楽しくなります……だから笑って行けるようになるのです。

賢明な愚人

英国のジェームズ1世(1566~1625)は本を読むのを好み、相当な博識だっ

たが、彼の行動には伝統的な制度と習慣を無視し、独裁的に振舞う点が多かった。彼は幾つかの論文から王権神授説を主張し、国民の間で自由なのはただ王一人だけで、国民は王が神から受け継いだ絶対的権利に服従しなければならないといった。それにより議会派と衝突をしばしば起こし、ある議員は王を指して、「キリスト教世界で第一の賢明な愚人」だと評した。即ち理論や書籍で得た知識は、経験を積んで得た知識に比べ役に立たないだけでなく、むしろ邪魔になると言う意味だ。王が識者憂患の適切な見本になるわけだ。

花見旅行（１）

桜の花見に行こう……！ 何ヶ月も前から望んだことが実践に移され、4月12日～14日（3日間）の間旅行することになったが、空がからかってくれた。雨が土砂降りで見物出来るだろうか……！ それなら話でもしよう。

4月12日（月）雨

山と山が重なっているが、綿雲が霧雨を帯びていて日の光がないので、山と山をはっきりと区別してくれ、車のガラス窓には沢山の雨粒が点々と流れ落ちて行き、夢の中の風景のような脱俗感を覚える。同乗の張老人は包みから取り出した焼酎の瓶を傾け、共に車中での情緒を遺憾なく味わった。雨粒は車窓のガラスをすっかり覆い始め、「黒い山並みは一幅の絵の如し」。詩が生まれ絵が生まれるとき音楽までが調子を合わせる。手動でインターネットに繋ぐと、今まで品切れだったカードを手に入れることが出来た。耳につけたカセットのイヤフォンからは湿っぽい天気に対応しい「恨みのミアリ峠」が流れて来る。桜、木蓮、連翹が行く先々で満開だ。「みみずくが鳴いたよ、私も泣けたよ」と言えば雨が上がった。どんよりとした空は明るくなり、車が智異山休憩所に着くと、山と山の間で灰色の雲が我々を歓迎する。南原市に入るとまた雨になり、車窓のワイパーがせっせと動く。春香トンネルを過ぎ「烏鵲橋ガーデン」と言う家が見える。「切符1ジャン(枚)をチュイハダ(取った)のか、酒1ジャン(杯)にチュイハダ(酔った)のか」……？ 車は山間を貫いて走っているが、クワンチョン駅に来て車3台が並んで高速道路を走っていた。雨がまた激しく降る。運転席の前は良く見えない。全州に入ると雨が若干晴れる。遠くに見える群山にはアドバルーンが空に踊っている。花見の宴に垂れ下がっている、名物料理の客寄せ宣伝用アドバルーンのような。雨がひどく降るので車から降りられず、車窓から見物し、暮れ行く夕陽に(株)仙花という工場の煙突の前で降りて、我々仙花の名前を解釈しながら「コリア荘」に入っていくと、旅館の主人が出迎え5階の最高級の部屋に案内された。

花見旅行（２）

「コリア荘」5階最高級の部屋はくつろいだ旅館の部屋だった。だが夜の間、

風は1秒たりとも止まず、びゅうびゅうと吹きうんうんと唸る音が物悲しく、窓を叩く雨粒は眠っている客にしがみついて助けてくれといっているのか...? 海辺の空と海が合唱しているのか.....? 辺山半島の一周は雨風のため果たして叶えられるのか.....? と思いつつ、夜はほのぼのと明けてきた。金剛河口堤の観光地は果たして見られるのか.....? それは空の雨神様の心次第だ。雨神様は良く見て下さった。峨山河口堰は防波堤の観光だ。峨山の鄭周永の立派な大工事の現場だ。何とまあ.....海水浴場も多いことよ! プチャンボ海水浴場、トクサン海水浴場、テチョン海水浴場、こんな所を通り過ぎテチョン港に来た。宝齡を過ぎ洪城郡に来ると12時半だ。洪城温泉では時間がなく、瑞山に来て静かなひと時を天が与えてくれる! 陽が時間を引っ張って走って行く。西山漁村の記憶と、しばしば聞いたマリンプの現地で昔のことを思い出してみる。春風に沈む陽が瑞山を越えて行くと、雨水が乾いてない新装なった高速道路を行くが、行く場所ごとに道が閉鎖されていて、引き返し、また戻り、高架道路工事がいつになったら完成するのか.....? 詐欺王鄭太守を釈放し、大同江を売り飛ばす金ソントルと対決させれば.....時間と共に青い空に変わった。白い雲に、春の空の強い日差しを遮ってくれる白い雲の幾つかの塊が春の景色を見せてくれ、くすんでいる私の心をぱっと明るくしてくれる。望んでいた花見の遊びは春雨に見舞われたが、今日は.....陽が中天から照らし、希望が甦る.....泰安半島に入り、パンボ海水浴場、アンミョン海水浴場、コッチ海水浴場の看板だけ見ながら車は走る。峨山農場の看板を見ながら瑞山干拓地を見物し、感嘆を禁じえなかった。やはり鄭周永*は偉人だなあ.....!

4月14日(水)

群山の桜は土砂降りの雨が降り、数多くのアドバルーンで黒い雲に赤や黄色の彩色がされ、堤の上に並んでいる桜並木に車を止めることが出来ず、今日は井邑にと方向を変えたが、また別の興味が生じないか.....? 気がかりだ。そうこうするうちに、桜のトンネルに入って行き3台の車のうち1台が行方不明になり、携帯電話で連絡し内蔵山に行くことになった。

行く途中の桜の絶景は口で表現するのが難しい。

経路は、群山 全州 マンギョン 金堤 扶安 辺山 出浦
古阜 井邑 淳昌 咸陽 IC 晋州を経て釜山に帰ってきた。

訳者注：鄭周永は韓国財閥、現代グループの創始者で先年物故。

部屋に蠟燭をつけておくと空気が綺麗に

みんな知っていることだが、知らない人のために一言言おう。それは次のようなことだ。昔は空気が澄んでいて、わが国に住んで来た先祖達は澄んだ空気の中で生きて来たのは明らかなことだ。未開の環境の中では公害があるはずはない.....! だが現在わが国は甚だしい公害の中で、医学が発展を遂げ、経済

的に生活が良くなり、寿命が延びたとは言うものの、そうでなければ公害によって生命が短くなるのは分かり切ったことだ。まだ空気が澄んでいる田舎の生活が羨ましいほどになっている。毎朝窓を開け、はたいたり、掃いたり、磨いたりしても、夕方になると埃が沢山発生する。人が行ったり来たり動くたびに埃が立ち室内は小さな埃の小さな宇宙となってしまう。そうこうするうちに、静かになったとき埃は下に溜まり、床の上にも机の上にも壁や家具にも付いて、すべて細菌がくっついた埃となり、人に害を及ぼす病気の原因になるのだ。それ故、室内に蠟燭をつけておくと、室内に一杯に満ちた埃が舞い上がって蠟燭に吸収されて燃えてしまう。部屋中の埃がすべて蠟燭で燃えれば清潔な空気となるのは勿論だ……！ だから蠟燭をつけておけば、火で埃が燃える音がし、蠟燭が若干の波動を起こすのを感じることが出来る。

花の中の王、牡丹が咲いたので

初夏の長閑な日に、家の庭で千里香が萎れ、その横では待ちわびていた花の中の王、牡丹の花が咲いた。濃い真っ赤な色をした、花の中で最も大きい花……そして去年は白色だった牡丹の花が、今年は薄赤色になって、並んで咲き誇っている。あの千里香は切ってしまうか……？とと思って眺めると、花が散った見苦しい姿は、20年の間香気をよく発してくれたけれど、木が古くなったからか死に掛けているようだった。切ってしまうと生き生きとした枝だけ土に埋めれば根付くのだ。名のない草花が色とりどりに「ミス花」の選抜大会でもやっているように盛況だ。棗の木を切って除けたので、日光がどの花にも平等に差し、害虫もいなくなったので、切ってよかったのだ。植木鉢を花壇の縁にずらりと並べておき、昔だったら写真も撮ったことだろうが、今はそんな気分ではない。一番立派に見える牡丹の花が中心となり、初夏の我が家の花の宴が始まる。だが、居間では胡蝶蘭が一番だ。

誰かに追われるような気持ち

それは一種のストレスのようなものだ……わけもなく心に引っ掛かるものがあるような苛立たしい気持ちになり、気が塞いで日を送るときがある。何日間も気が晴れず、すべてのことに支障をきたす時期がある。それは同一の衝撃を受けた後で、その影響が消えないもののようなのだ。長い間その影響が消えず、また他の小さなことに対しても、その症状が拡大され、相次いで起き、期間が延長されるかも分からない。冴えない気候で、寒くもなく暑くもないのが春の日だと言うが、興味のない春なのだ。長閑で暑くない春の日が私は好きだ。最近は大庁公園で八重桜が満開で、人でごった返していると聞いた。本当にそんな有様だ。五色満開の八重桜は去年私が見て来たので良く分かっている。赤、黄、灰、白、青、など様々な色の八重桜は、老人達の昼食の場所に日陰を提供してくれ、楽しく仲むつまじく酒を注ぎ交わしながら、一時であっても幸せを感じ

られるので、大庁公園の八重桜は幸福な行楽地だった。積もるストレスをこんな所で解消してはどうであろう……。

陽炎が立ち鳥が鳴けば明らかに春だよ

明け方4時半に通りを歩いて行く。暗い軒下で、そして街路樹で鳥達がちゅんちゅんと力強い声で合唱していた。今までなかった鳥達の囀り声は、果たして私の一日が始まる吉兆なのか……？ あるいは凶兆なのか……気になりつつ歩いて行く。上の町内のタクシー会社からどっと出て来たタクシーが、道の両側に一晩中放置駐車している車の間をやっと通れる車道を擦り抜けている。車が通るたびごとに、駐車している道の両側の車の間で身を交わしながら、車が通り過ぎるのを待っている。更に凶事かも分からない鳥が鳴いていたのを気に留め、細心の注意を払っている。今日の昼に窓を開け釜山港を見渡すと陽炎が立ち、太宗台の方向の通りにも陽炎が立って、春の日が更に心の奥深くで感じられる。私は屋上の糞を下の庭に移したが、家事を手伝いながら考える。キムチとミョルチジョッカル(片口鰯の塩辛)を屋上に置いていたら、夜の間泥棒に遭ったことがあった。隣の家を通過して屋上に上がることも出来るのだが、証拠がないので口をつぐんでいなくては……！ 道端にある隣のスーパーの子供達が元々乱雑で、高い二階家の屋上まで上がったり下りたりしながら走り回って遊び、私からひどい目に会ってからはそんなことはなくなったが、最近その家が移住したのか見えなくなった。ところで、向かい側の多世帯家屋には知らない人達が借家人として入って来て、知らない人が多くなった。ところで、去年の冬にはミョルチジョッを汲んで行くという事件があったが、人を疑うことは罪になるので忘れてしまうことにして、下の階の敷地に移すことにした。我が家のミョルチジョッはソウルのわが息子と娘の家では絶対的なものだ。キムジャン(漬け込み)は何よりもこのミョルチジョッの味が左右するのだ。キムジャンの時にはソウルに3斗送ってやる。2斗は生のジョッで、1斗はテリンジョッ(漬けたもの)で、1:2の比率で漬け込む。

今日は春の気分だ。陽炎程度が問題なのではない。野には花が満開で雲雀が鳴いて天高く揚がる時、過ぎた青春が回想され、楽しい毎日を謳歌する新しい人生を再生させようとする執念で、同じ静かで安らかな心で眠ることの永遠であることと、後世に残る子孫は勿論、後世代のわが民族の永遠な幸福を念願するのだ。

バスの競争

高速バスターミナル前の張齒科に行くには、影島からは釜山駅まで行き、バスを乗り換えなくてはならない。従来は135番で高速ターミナルへ直行したが、路線が変更になり、釜山駅で35番に乗り換えようと待っていると、35番バ

スが来たが、真っ直ぐ通過する。乗客は数人しか乗っていなかったが、停留所には止まらず、10m位行き過ぎてバスは止まり客が2人降りた。私は走った。だが車は無情にも私よりもっと速く走り去ってしまった。直ぐ続いて35番がまた通り過ぎる。私は手を上げて走って行った。運転手は私をチラッと見たが停留所には止まらず、前の車よりもっと速く走り去った。悪い運転手だと言いながら頭の中をさっとよぎる昔のバス競争を思い出した。そうだ、前に行く35番バスと競争しているんだな。客は問題ではない。誰が一等になるかが問題なのだ。2台とも乗客はがら空きだが、それでも男だ、一等になって金メダルが大きいことだ。5分後にまた35番が来て、乗ることが出来て幸いだったが……1時間後に来るバスだったら私がおとなしくしているだろうか。市役所の運輸課が喧しかったことだろう。

偉大な英雄、忠武公の誕生日

今日は忠武公 李舜臣の誕生日だ。3代聖雄（偉大な英雄）として崇め尊ばれている李舜臣は、世宗大王、黄喜政丞に次いで「李舜臣将軍」として指折り数えられている。歴代の三大聖雄の中で、国のために顕著な戦果を後世に歴々と残し、尊敬されている将軍だ。ところで最近その聖墓に鉄杭と刀を打ち込むが如き行為で、血を流したわが民族もいたのに、わが国にこのような虫けらにも及ばない行為をする人間がいたのだ。日本人がわが国を滅ぼそうとして、ありとあらゆる悪業を行ったときも、わが国の親日派達が協力してやらなかったなら、敢えて成功しただろうか？ 亀甲船を造って海に偉容を轟かせ、日本人に敢えて接近させず、右水營のウルドゥンボンで全滅させたので、小さなわが国が今まで他の国に吸収されず、KOREA が全世界の中で、オリンピックでも金メダルも取り、優秀な国民になっているのだ。今日は忠武公 李舜臣将軍の誕生日だ。このような立派な先祖を戴くわが国民は矜持を持ち、自信を持って生きて行かなくてはならない。わが国民は李舜臣将軍の名誉を毀損しないよう立派に生きよう。

タンポポの花が咲いたよ

大門の外の階段に黄色い花が2輪可愛く咲いているのを発見した。タンポポの花だ。セメントの壊れた間から矢印のような青い葉っぱが真っ直ぐに生えて、黄色い花が2輪ぱっと咲いているのが可愛く長閑で、その情感が天気合っている。この花は少なくとも10輪以上は満開となるだろう。階段の修理よりもこんなに壊れた間から顔を出すタンポポの花が価値のある花だ。何処からか花の種が飛んで来て、私を同僚と思って訪ねて来たのか？ それだから私はタンポポの花が好きだった。遠いところを選ばずさまよって、何処にでも場所をとれば、水があろうとなかろうと、食べる物があろうとなかろうと、遅く生き

残り、時には何処かの塀にでも取り付いて伸び、力強く生きて行く。黄色い生き生きとした花を咲かせ、にっこり笑うその健康な心を私は読むことが出来る。黄色い花が散り、白い綿のような種が落下傘となり、行きたい所に旅立って行く。そうして我が家の大門の階段に腰を下ろしたのだ。私はお前達が一番好きだ。みんなみんな集まれと伝えます。わが家の門の前へ……。

太宗路の蔓薔薇の花

毎日何度か私が往来している太宗路のバス道路の中で、最も索漠とした所は・・・騎馬隊（今の機動隊）から油公前までのセメント塀だろう。人の眼は大体同じ感覚を持っているので、その索漠としたセメント塀が美しく見える人はいないだろう。区役所でもそのように感じたのか……？ 何年前からか蔓薔薇を植え、その塀の上に這わせておいたのだ。毎年今頃になると、赤い蔓薔薇が満開となり、通り過ぎる人の目を楽しませてくれる。塀に塗ったような、いや、絵を飾ったような蔓薔薇の華麗な美しさを鑑賞しながら、通り過ぎるバスの中から見ていると、韓進重工業の塀が見え、薔薇の花の下に1列にオートバイが並んで止めてあるのが、重工業の勤労状態を厳然と感じさせてくれる。若い技術者達が心血を注いで立派な船舶を建造し世界各国に輸出するのはどんなに大変なことか……美しい蔓薔薇で激励してやる一瞬だ。

蛍雪の功

蛍と雪明りを燈臺（油皿）の代わりにして勉強したと言う故事から出た言葉だ。苦学の甲斐があることを言う。今から1500年も前の昔、車胤と言う人物がいた。彼は幼い時からおとなしく勤勉で、数多くの本を読んだ。しかし家が貧しく燈臺を明るくする油がなく、夏の間は薄い絹で作った袋に数十匹の蛍を入れ、その灯りで本を読んだ。彼は遂に尚書郎といって、天子の近くに仕え勅書を受け持つ高い官職に上った。また同じ頃、孫康という人物がいた。彼は幼い頃から気立てが善良で、善良な友人とだけ付き合った。ところで家が貧しく燈臺を明るくする油がなく、冬には雪が積もっている窓際に机を置いて雪明りで照らして本を読んだ。そのように苦心した甲斐あって彼は後日、御史大夫（治安局長）と言う重責を任されることになった。

列車の窓辺で

窓から外を見る。万物が洪水のように流れて行き、遠い山はのろのろと流れている。近くの緑陰には白い花が満開で、少し前までの五色燦爛とした美しさはなくなった。高速で走る列車は三浪津を経て新しい客が乗って来て、私の横

にも50を超えた女性が座る。顔が浅黒く眼は深く落ち込み、口が飛び出した人相の悪い女性だ……何もいわずに席に座って、買って来た海苔巻きを車内で取り出して食べていた。

私は窓辺にもたれかかり、流れて行く洪水のような山と田畑そしてすべての物を見渡しながら深い思いに耽っている。前の席には30後半位に見える青年が座る。いくらも経たずに彼と同じ年頃の青年がその横に座る。そのうち一人はしょっちゅう携帯電話で電話を掛けたり、掛かって来た電話を受けながら静かな声で話をする。それは車掌が車内放送で携帯電話の使用を慎むように言ったせいだ。一人の青年は椅子を後ろに倒して目を閉じ眠った振りをしていた。後ろの人は誰でも良い気持ちでいるわけがない……私は特に前の座席の人が後に椅子を倒すのが嫌いな方だ……すると私の横の女性も椅子を後に倒し、ぱっと横になってしまう。そうして目を瞑って眠るのか……？ 夜行でもなく真昼に女性がみっともなく横になり眠るとは……見苦しいことだ。

水原駅に来た。前の青年が起き上がり出て行く……私が……おい、……と言うと振り返る。この椅子をちゃんと直して行きなさいよ……！と言うと再び戻って来てちゃんと直して出て行く……そして、この女性に聞こえるように、私は椅子を後ろに倒す人が一番嫌いだ……後ろの人に不便をかけることも他人に被害を与えることだよ、と言うと、一人で椅子をちゃんと直そうと骨折っている様子だ……だが……上手く行かない……もともと、でかい体で後に力一杯押してしまったからそんなことになるのだ……！永登浦でこの女性も出て行った……私が椅子をちゃんと直そうとしても、元々無理して後で外れてしまったのだから駄目だ……全てのことを、見た目にも良く、他人に被害を与えないようにしなくては……。

エミレ鐘

慶州国立博物館の前庭には銅鐘が置かれています。わが国では最大の鐘で、統一新羅の聖徳王の功德を称えるために、その子、景德王が造り始め、その孫、礼恭王が完成させた国宝29号です。銅鐘の名は「聖徳大王神鐘」といいます。しかし、俗にこの鐘は「エミレ鐘」と呼ばれます。この鐘がそのように呼ばれるようになったのには有名な伝説があります。

その時代には盗賊どもがはびこり、凶作にもなり乱世でした。景德王は先王の冥福を祈る鐘を造れば、悪鬼どもが退散し太平の御代が来るものと念願し、銅20万斤で鐘を造り始めました。この作業は彼の息子の礼恭王の時代まで続けられてので、鐘を造る材料が不足し、僧たちは家々ごとに喜捨を受けようと歩き回りました。一人の僧がすっかり倒れた家を訪問したとき、赤ん坊の母親が「私の家には何も喜捨する物がありません、この子でもよろしければお受けください」と言いました。

遂に鐘が完成し、鐘を撞いてみると不思議なことに音が出ませんでした。その日の夜、僧の夢に一人の老人が現れ、「生きている赤ん坊を入れて鐘を造れば音が出る」ということでした。夢が覚めた僧はその女性を探しに行きました。

すると、仏様との約束だから喜んで赤ん坊を差し上げますと言いました。その赤ん坊は直ぐに熱い金渋に入れられ、ついに鐘が完成されました。鐘を撞くや否や、今まで聞いたこともない雄壮な音が響き渡りました。しかし百姓達にはその鐘の音が、あたかも赤ん坊が母親を恋しがって叫ぶ声「エミレー～エミレー」と聞こえました。それからその鐘は「エミレ鐘」と広く呼ばれるようになったのです。何事でも大きなことは犠牲があつて成就されるものです。

久し振りだ

夜8時32分釜山駅に到着すると、アリラン観光の前で娘が車を持って来て待っていた。1ヶ月間空けていた私の部屋だが、家に帰り夕食を食べ荷物を整理し終えて、10時を過ぎて机の前に座ることが出来た。机の上には郵便物が10余通私を待って伸びをしていた。

1ヶ月間のソウル生活に、本当に1年間家を空けていたような気がして実に久し振りだ。その中で先ず日本の女性が送ってきた手紙から封を切ってみると、5月31日(月)と書いてあった。たった4日で日本から出した手紙が私の手元にあるのだ。いずれにせよ国際的にも早い世の中だ。いつもこの女性は手紙の初めに日付を書く。私は手紙を全部書き、末尾に日付を書く習慣だ。その点は違うが、日付は是非必要なものだ。手紙が若干遅れた理由は風邪をこじらせたからで、その間苦勞したと言う。5月31日には友人と一緒に夜桜見物に行き、夜風が冷たくて風邪を引き半病人の状態だと言う。「風邪気味」というのは、ハングルでは「感気がある」と言うことで、芳しくない。級友が、5月に亡くなった人を含め、6名亡くなったことになるという。この女性は自分の体が少しでも痛ければ、友人達の死んだ話をする。多分自分も死ぬこともあると言う悲しい気持ちになり、その哀切な感情が私を悲しい気持ちにさせる。

早くに寡婦となり、切なく感傷的な現実からいつとはなしに勇気を出して、活け花は勿論のこと茶道やその他女性が学ぶことはすべて学び、英語翻訳を内職としながら年金で気丈に生きて行く品位のある女性だった。韓国の切手収集で個展を夢見ているが、何時出来るか分からない。私はこの手紙を繰り返し読みながら可哀想になった。人生には貴賤はない。そして国境もない。みんな同じ命を持っている。その命は各自の考えでは何よりも最も大切な物だ。その大切な命を尊重してやらなくてはならない。自分の命だけ大切にし、他人の命はなくなっても良いと思えばどうなるだろうか？命の大切なことを最も近い所で見感じながら、独り言のように言ってみる。

苦勞の後に楽が来ると言うが

ああ～涼しくて楽だ。 エアコンを設置しようと、冬の間、便利なように下にスチールポールを架設したのが高さに手違いが生じ、合わないので、1

時間以上をはらはらしながら汗を流し苦勞して遂に成功した。

窓に合わせてサッシ屋で作って置いたものだが、年が変わればすべてのものは事情が変わる……室内の装置を合わせ、外部の装置を取り付けようとしたが、空気を吐き出す装置には雀が中に入り込めば故障するので、中間に網を入れ防止しなくてはならない。外部で切り離そうとすると2階の出っ張りを通さなくてはならないが、その通り道の要所に植木鉢があって、百年草が植えられている。少し除けておいて無難に通すことが出来たが、その棘がズボンを通して腿に刺さってずきずきするが、見えないので引き抜けなかった。老眼鏡と毛抜きを動員して、沢山の百年草の棘を相当な時間をかけて殆ど完全に取り除くことが出来た……このように苦勞したからか、設置したエアコンをつけて試運転をしていると涼しく安らかだ。

苦の後には楽がある……それと反対に、楽の後には苦があることもある……どちらの場合に当てはまるか分からないが、悶着の多かった長官夫人達が数千万ウォンの服を着てどれだけ幸せだったのか……？ それも瞬間的なことだ…直ぐに苦に取って変わられるなら、暫くの幸せがどれだけの大きな苦痛だったことか？ 大韓民国人の全部が証明していることだ。

職業

夜中に何かの音で目が覚め、再び眠ろうとしたが眠れなかった。時計は12時、目を閉じていると色々な幻想が浮かんできて昔のことを思い出した。随分昔の話だが私がバスに乗って近いところを旅行中のことだ。私の横に50くらいに見える紳士が乗っている。市内を走るバスから外を見渡すと、遠くに見える工場の煙突のてっぺんに人が登って煙突掃除をしている。蟻くらいの大きさに見えるその人は遠くから見ても真っ黒な姿で熱心に仕事をしている。だが私の横に座っている紳士が言うには……あれも職業なのかね、チェッ……私はその紳士の言ったことには無言で、その言葉を、危険であるにもかかわらず仕事をしている人の職業が哀れで言っているのか……あるいは無視して言っているのか……は分からなかったが、煙突をなくせばいざ知らず、煙突掃除をしないわけにはいかない状況で、その職業をする人がいなければ掃除を誰がするのか……？ だが煙突掃除に命をかけて進み出た職業人に返って来る反対給付はどの程度か……？ と言うことが問題だ。1年に1度または2年に1度程度の煙突掃除は製品生産で得られる価値を考慮して職業人の生活水準を十分保障してやらねばならないのではないかと考える。

1回やれば1か月分の他の職業の本給程度にならなくてはとか……処遇が特別でなくてはならないと思いながら旅行をしたことが思い出される。むしろ楽な事務職の待遇が良い時節には、そんな技術職を冷遇しているので、「あれも職業なのかね」という言葉も出るようになったのだ。職業には貴賤はない。他人が出来ない職業は貴重なものだ。これからは技術職が脚光を浴び、優秀な発明品がわが国から続出し、全世界に輸出して富国になることを望むのみだ。

2002ワールドカップのエンブレム

2002年韓・日ワールドカップサッカー大会のエンブレムが公開された。エンブレムは、人が地球を持ち上げているワールドカップのトロフィーを形象化したもので、普遍的であり世界的価値を指向している。トロフィー周辺の円形は、宇宙、太陽、地球を象徴し、ひいては人生を意味する東洋思想を表している。円形の左側上の部分が開いているのは、どんなチームでも出場できるワールドカップ大会の開放性を意味する。また、色相は赤、黄、青、緑、白など世界的な5種類の色を使用した。その間の空間にも、アジアで「中心」と「純粹」を意味する黄色と白色を主な色相として選択した。英語で韓国と日本を表すロゴは、二つの国の国旗の色から取ってきた。

また、大会開催年度である「2002年」の中間の「00」を、すべての国家の永遠の和合と協力を意味する無限の記号(∞)で表示した。公式エンブレムは英国に本社を置くインターブランド社が、国際サッカー連盟(FIFA)とFIFAのマーケティング代行社であるISLから委託を受けた韓・日組織委員会とで協議して製作した。このエンブレムはFIFAと韓・日組織委員会が指定する公式パートナー、供給企業体、商標と権者のみ使用権を持つ。製作費用は百万ドル(約12億ウォン)かかることが判明した……。

[99.5.31 韓国経済より]

蚊取り線香の煙

数日前...眠ろうとすると耳元でブーン...と蚊の音が聞こえる。すぐさま、去年の使い残しの蚊取り線香を取り出し火をつけた。部屋の戸の前に置くと、煙が女房が寝ているところに来るので、場所を移してくれと言う。内側の方に移すと、今度は私の方に煙が来て咳が出る。仕方なく床から机の上に移すと公平な結果となり安堵した。毎日、蚊取り線香に火をつけるときは、机の上に置いて座っているのだが、コンピューターの前に座ると煙が私の方に流れてくるので、その時は机の下に移す。こうして蚊取り線香の役割は有益である一方、不便を与えることは……すべてのことに長所と短所があることが分かるのだ。蚊取り線香の皿から上る糸のような煙が上って行きつつ雲のような煙となり散らばって消える。

蚊取り線香の煙は下から上に上がり、キラーは上から下に下がってくる。気体と液体は空気の重さより軽いものは上に上がって行き、重いものは下に下がって来る。キラーを振り撒けば戸を閉めなければならないので暑くて息苦しい。蚊取り線香は戸を開けておいても良いので、私はこちらの方を好む。今私は豆粒くらいの大きさだけ残って燃えている所から、糸のような煙が立ち昇るのを見ながら、コンピューターはこれくらいにして編集しようとしている。

久し振りに歩いた夜明けの登山道

最近1ヶ月間もソウルで過ごしたが、釜山でも明け方に起きると、ミグムとかいう物理治療をするので、早朝登山に行く時間がなかった。そんなに何をすることが多いのか……？日毎にメモに書き込み、しょっちゅう見ながら一つ一つ線を引いていって実践しなくてはならない私の生活だ。それだから早朝登山などする時間があるのか……？今日は腰が痛くミグム治療をしないことにし、登山道を歩いてみようと思ったのだ。5時……清掃車がうるさい音楽をつけっぱなしにして町内の隅々まで騒がせている。そんな場所を過ぎて、大通りの自動車を避けようと思って路地ばかり選んで、曲がりくねった、人がすれ違うのも難しいほど狭い道を通って登って行った。

先ず、ヘヤン高等学校の校庭に入ると、テニスをする人……鉄棒を握り上に乗ろうとしている女子……大きな木に腰をこすりつけながら変な運動をしている女子。不思議な光景だ。私は運動場を通り過ぎて学校の建物の方へ高い階段を上って行く。色とりどりの草花の燦爛としている花壇で、楽しく花を見物しながら明け方の私の心を純化させている。周辺を一回りして、それ以上の運動はむしろ健康に無理なようなので、また別の路地を選んで家に帰ってきた。久し振りの運動だったからか……暑くて息が切れる有様だ。エアコンを朝からつけて30分くらいになるので今は寒くなった……エアコンを切る。今日の早朝運動は終わった……今日の活動の前奏曲だ……朝飯を食べる今からが私の活動が始まる瞬間だ。

ソロモンの智恵

ソロモンは空前絶後の栄華を極めたほど、その智恵も卓越したもので、旧約聖書の列王記を見ると、「ソロモンの智恵は東洋人の智恵とエジプトのすべての智恵よりももっと大きい」と賞賛している。彼は動植物学にも明るく、文筆の才能も抜きん出ている。詩歌1500首、箴言3000を作ったと言う。ソロモンの智恵を物語る代表的なものとして、次のようなエピソードがある。

一つの家に二人の娼婦が暮らしていたが、いつか殆ど同時に妊娠した末に、3日の間隔を置いて同じく男の子を産んだ。後で子供を産んだ娼婦はひどく寝癖が悪い女で、ある夜子供を押さえつけて窒息させてしまった。このことに気付いた女は、横で眠っていたもう一人の娼婦の子供と自分の死んだ子供を取り替えておいた。次の日の朝が来るや、二人の間に大喧嘩が起こった。互いに生きている子供が自分の子供だと言い張ったのだ。とうとう解決出来ずにソロモン王に提訴した。

ソロモン王の前に出てきても、二人の女は相変わらず争っている。暫くの間見渡していた王は、臣下に刀を持って来させて、「この刀で生きている子供を真っ二つにして、あの二人の女に分けてやれ」。その言葉を聞いた人達はみんな驚

いて目を大きく見開いた。特にその子供の母親は血の気が引いて顔が真っ青になりこう言った。「王様、どうかその子を切らないで、そのままあの女に上げてください」。だがもう一人の女は「いいえ、二つに分けて二人に下さい」と平然と言った。その言葉を聞くや、ソロモン王は「その子供は、切らないで下さいと言った女に与えよ」と言った。百姓達はこの裁判を見て、神様の智恵だとみんな褒め称えたという。

小型電子製品と乾電池

私が使用している小型電子製品は、1) ポケット用ラジオ、2) 電気剃刀、3) 小型録音機、4) 小型カメラ、5) 小型カセット、6) 卓上時計、7) 卓上ラジオ、8) 小型壁掛け時計、9) 電気テスター、10) 血圧計、11) ポケット用フラッシュ、等々があるが、主にそれに使用する乾電池は、サイズ AA とサイズ AAA だ。乾電池用電子製品を購入するときは、先ず電池を買いやすいことが大切で、次に少しでも長く使用できる乾電池が経済的だ。

1) 電気剃刀を使用する場合、少し大きい物はサイズ AA で、毎日使用して 15 日間使えた。サイズ AAA は少し小さい物なので、同じ使用度数で 7 日間使えた。2 種類の電池の価格は同じだ。市中で買うと 2 個 1 組で、小売店で 1000 ウォンと言う店もあれば、1200 ウォンで買うこともあった。そして卸売り店を訪ねてみた。国際市場に乾電池の百貨店があるが、ない乾電池はないほどだ。乾電池なら何でもあるが、1 個、2 個の販売はせず、1 箱で売る。1 箱は 40 組入っていて 24000 ウォンだ。したがって 1 組が 600 ウォンの訳だ。沢山使わない人はスーパーで 1000 ウォンで買って使うのが良いようだ。

2) 小型録音機はサイズ AAA を使っている。録音機は必要なときだけ使うので、平生は乾電池を抜いておくのが良い。

3) 小型カメラはサイズ AA を使うのが経済的だが、Cr123A 3V を使うのが新型で、小型カメラに多く使われている。したがって、フラッシュに AA を使用するるので、主にカメラ専用として使われている。

4) 小型カセットはサイズ AA を使っている。2 個使用している。

5) 卓上時計もサイズ AA を使うことが多い。

6) 卓上ラジオもサイズ AA を使う。2 個または 4 個を入れることもある。小型壁掛け時計もサイズ AA を使う。

7) ラジオ系統は乾電池に神経を使わなくても良い。

電気剃刀、録音機やカセットなどモーターを使用する機械は電池が弱くなると直ぐ使用できなくなるので、新しい物に替えて、その電池を捨てずに保管しておきラジオと時計に活用すれば長いこと使うことが出来る.....正に再生使用だ。私は乾電池テスターを持っているので、測ってみて捨てる物は捨て、再使用する物を選び出している。

盗賊物語

人間が生きている世の中には多くの話の種があるが、その中でも盗賊物語が多くの人達によって紹介されている。

アラビアには「開け胡麻」の主人公「アリババと40人の盗賊」があり、フランスには「怪盗ルパン」と、パン1個盗んだことで生涯追い回される「ジャンバルジャン」があり、英国には森の中の義賊「ロビンフッド」がある。中国には乱世に盗賊になった英雄達の話「水滸伝」があり、わが国にもやはり、貪官汚吏を剔抉し、貧しい百姓を救済するという洪吉童の「活貧党」がある。

最近では映画にまで盗賊または泥棒をした主人公達が登場する。完璧な防御網を潜り抜け悠々と侵入して物を盗んで行く専門盗賊から、烏合の衆の盗賊までその種類が多様だ。こんな盗賊たちの話を聞く人達は満足を感じるという話もある。あるいは、そこには持てる者に対する貧しい百姓達の復讐心もあるのかも分からない。人類には盗みをしたい欲望が内在している、と心理学者、文化人類学者たちが言っている。腹立ちまぎれに「この世の中の奴、みんな泥棒の世の中だ」と言いもする。

江原道春川の、ある昔馴染みの店のおばさんは、何処かの豆腐泥棒が残して行った手紙を受け取り目頭を赤くしている。「何日も食わず腹が空いて、おじさんの店で豆腐一丁盗んで食べました。申し訳ありません。でも泥棒は泥棒で...今になって、お代を置いて行きます」。

豆腐の値段は2000ウォン、すまないね.....(4.13ハンギョレ新聞から)

数千億をごくりと飲んだ泥棒は大声を上げ、豆腐一丁盗んだ泥棒は良心の呵責に苦しむ世の中だ.....(カトリック釜山 参照)

責任と社会

何時だったか学校の女性教師が自殺したと言う報道を聞いたことがあった。自殺した理由は、友人の保証に立ったが債務者である友人が能力がなくて逃亡してしまったので、保証に立ってやった人が責任を負って償ってやらざるを得なくなり、家も手放しそれ以上何物もなくなって命で償ったのだ。社会がこのような保証制度を、人情のある善良な人を殺しうる陥穽を詐欺漢達に提供してやる悪法をなくすときが来たと思う。

また私が何年か前に観光に行ったことがあった。40名にもなる男女の老人達が観光バスに乗り、空気の良い山川を回って見ながら、ある都市の旅館で一晩泊まることになった。観光案内員は50くらいになる肥った女性だった。説明も上手で言葉も巧みで、乗客達は楽しく観光することが出来た。だが寺刹に入るとき、無料入場なので経費からの所得を返して貰おうと、予め敬老証を集めて持っていた案内員は、旅館に入るときは一旦返してくれなければならないのに返してくれなかった。私のパスポートには住民証と敬老証そして現金が3万ウォン入っていて、敬老証以外のものだけ返してくれといったが、責任を持

つから心配するなといった聞き入れなかった。そしてさっさと旅館に入ってしまった。私は女性案内員が小さな鞆を持って降りたので心配はしなかった。

だが翌朝バスに乗るため、みんなバスの方に行っていた。旅館の前に止めておいたバスの前のガラスが壊れて、中に置いてあった乗客の敬老証は勿論、預けておいた物は全部泥棒に遭ったのだ。みんなが恨み騒いで見ても、蜂蜜をなめた唾のように押し黙った女性案内員は、責任を持つと大声を上げたあの時とは違って、草が枯れているようになっているのをどうすればいいのか？私は敬老証が入った財布を、寺刹で暫く使って返してくれるものと思っていたが、丸ごとなくなってしまう、帰ってから洞事務所に行った。洞長にそんな事情を話して、敬老証と住民証の再発行の手続きをした。ところで、派出所に行き先ず申告をしないでと言うので、走って行って申告し、親しい友達である洞長だけれど、することは全部しなくてはならなかった。こんなときも責任を負う人は旅館の主人でもなく案内員でもない。ただ被害者である本人なのだ。

こんな世の中は誰を信じて生きなくてはならないのか？人をみんな信じなくてはならないが、険悪な社会では信じる人がいないので誰を信じ頼りにしなくてはならないのか.....？だが多くの人の中にも何人かはいるのだ。明らかにいるのだ。明らかに.....。

孔子の前で論語を

私は昨晚、顔見知りのいない集会に出席した。食堂に集まったが、私の横にいる人はある新聞社系統の編集員だと言った。出席人員は11人で、酒を一杯ずつやりながら、横に座っている編集員と二人でコンピューター談義をすることになった。私も hitel でインターネットを学んでいますと言うと、hitec は PC 通信で、インターネットではありません.....！と言う。私は、そうですか... ..？と、だんだんと難しさを感じた。

今インターネットを学ぼうとする素人と、専門家である新聞社の編集員とでは、孔子の前で論語の話をしているようなものだ。話はさらに発展し、プリンターの話に入って行った。プリンターの種類が論題に上り、[1]ドットプリンターはリボンで、[2]インクジェットはインクで、[3]レーザーは粉末材料だと言うと、レーザーはレーザーと言って何も使用しません、と言って、粉末を使うのは×××だと言ったが、何と言ったのかな.....？忘れてしまった.....こうしてみると、知らないことは黙っていなくては.....何も知らない私が時折行って知ったかぶりをする癖があるのを恥ずかしく思う。過ぎたことを反省でもしよう.....壊れた物を再び元通りにすることは出来ない。それに気が付けば孔子だな、と思い、知らなければ黙っているのが最高だ.....。

私は失ったものが余りにも多い

他人のする通りのことをするのを猿のようだという。猿は人間の行動を見てそっくりそのまま真似する。人間が猿に石を投げると猿も石を人間に向かって投げる。韓方で薬に使うチュギョンとか言った名の赤い石があって、子供がひきつけを起こすと水で研いで額に塗ってやると治ると言う話を聞いた。その赤い石を手に入れるには金剛山の高い岩の上で探さなくてはならないが、人間はそんな高い所に登ることができないので、そこに登った猿に石を投げると猿が赤い石を投げるのだと言う。

易者が厄を払うためにお守りを書いてやるとき、この石を硯で磨ってお守りを書いてやるともいう。これは手に入れるのが難しいので相当に高価な品だ。こんな猿のように好奇心の強い若いときは、他人のすることはすべてしてみようとする。この好奇心というものは一方では人間の発展の根本にもなっている。エジソンが好奇心がなかったら、いつ文明の利器である電気製品を発明することが出来たであろうか……？私も若かった頃は他人のすることはどれもこれもすべて真似してみた。ギター、ハーモニカは勿論、アコーディオン、マンドリン、尺八、のような音楽に対しては少しずつやってみたり、運動は排球、卓球、蹴球、登山など色々やったし、自動車運転、写真なども趣味として行って来た。だが今は忘れてしまって一つとしてできるものはなくなった。私は忘れてしまうことが非常に多く、この外にも精神的、物質的、情緒的、甚だしくは友人も竹馬の友、20代前の友人は尋ねてみる事が出来ない。ただ初等学校の同窓生の中では特別に親しかった友人はみんな死んでしまった。こんなことを思いながら今朝窓の外を見渡すと、夜の間にも大雨が降って、大門の前の我が家の車が綺麗に雨で清掃されきらきらと光っている。娘がソウルの彼女の息子と娘のところに行って留守なので、主がいなくて寂しそうに見える……すでに10日間になるが明日は帰って来るとのことだ。

メイフラワーの誓い

メイフラワーは1620年英国の清教徒達がアメリカ大陸に渡るとき乗って行った船の名前だ。当時英国では清教徒に対する迫害が甚だしかった。これに耐えられなかった一部の清教徒達はネーデルランドに身を避け、そこからスピードウエル号に乗ってアメリカ大陸に向かった。スピードウエル号は英本国を出発したメイフラワー号と落ち合っ一緒に大西洋を航行して行ったが、途中でスピードウエル号は難破し沈没したので乗客達は全員メイフラワー号に収容された。この時、両船の乗客達は1箇所に集まって新天地を開拓することを誓った。これをすなわちメイフラワーの誓いと言う。船はその年の12月21日当初の目的地であるバージニアより遥かに北方にあるプリマス港に到着した。この時上陸した一団の清教徒達はピルグリムファーザーズすなわち巡礼の始祖という。彼等の勇敢な精神は米国の開拓史に脈々と流れている。

今日も日が暮れて

暑いとは思わずにいたが、窓を閉めると急に暑くなる。昼は窓から涼しい風が入って来て爽やかな気分でも過ぎて来たが、夜になって蚊が襲ってくるのを防ぐためだ。扇風機をつける。何年か前に設置した壁掛け扇風機はリモートコントロールで風を調節するのだが、風向調節を家族が間違えたのか、首の部分の付属品が折れてA/Sの修理をしてから数年になり、再び同じ故障が起きた。

私が購入した代理店は既に移転して、今は小さな衣装室に変わっている。今では市内の何処にもゴールドスターの看板は見えない。だから私がいい加減な物を差し込んで角度を調節しようと汗を流している。今ではあまり神経を使わなくても良い。エアコンは良いのだが、一度つけておくと何分も経たずに寒くて消さなくてはならない。そうすると何分もせずにもた暑くなるのでまたつけなくてはならず、消したりつけたりする不便な点がある。なるようになるで生きて行こう。窓の外を見ると釜山港の海を越えてコンテナ埠頭が見える。黄色い燈火が薄明るく数十個ついていて、あそこでは昼と同じで、作業場は昼夜を分かつた蟻ほどの大きさの人間が仕事をしている……！日が暮れると、西山を日が越えて行き、後から続いて来るのは、静かな星星が満月前の12日の月を護衛しながら、東の空からかなり長い時間をかけて昇ってくるのだろうか……？

しかし空は昼から綿のような雲で覆われ、物思いに満ちた雰囲気だが、梅雨期の空がこの程度ならば幸いなことではないか？天は助ける人を助けると言った……善良に生きよう……中傷し、只で奪おうとし、人を殺している北の横暴には天は助けることはないだろう……！あれでは我々も助けてやる必要さえ感じない。何故……牛を持って行ってやり、肥料をやり、あらゆることを助けてやったが、今回の西海のこともそうだ……金剛山観光の「ただのどこそこの旅人」の留置行為など、人間も受け入れることは出来ないが、天は受け入れるのだろうか……。

女の一生、男の一生

ある大学教授が、結婚式の主賓の祝辞で、蜥蜴の雌と雄の生命維持の例を挙げて話したのを聞いたことがあった。家の主人が建築後10年になる家の修理をするため、はがしてみると、蜥蜴が1匹腿に釘を打ち込まれ動けずにいたが、死なずに生きていたと言う。

10年間、この雄の蜥蜴を、雌が食べ物を啜えてきて食べさせ生かしたという健気な夫婦愛は、動物と言えども強い感動を与えたことだった。このように動物でも人間でも情というものとは否定できないことは、夫婦の間では、孝子といえども悪妻になった……と言う話とも関係があることだ。もう一つ著名な方の主賓の祝辞で、この世の中で最も貴重な人は女房だ、と言い、夫婦二人でいつも一緒に生き、そのうちにどちらが先に死ぬにしても……死ぬ時まで守って

やる最も近い間柄だといった。

だが夫が先に行くことの方が多いが、そのような場合はその夫は幸福な方だ。死ぬことは、葬式を執り行なう女房の悲しみよりは幸福と言う他はない。

女は昔から夫を大事にし、子供の育成のために一生を捧げて生きてきた。だが夫の能力に従って貧富の分かれ道で、貧に墜落して一生を空しく送り死んで行くなら、その女の一生は悲惨なもので、幸いにも富に依存すれば暖衣飽食で華麗な一生を送ることになるのだ。男は自身の能力を最大限に発揮して妻や子供の生活のために努力して家庭の安定を図らなくてはならないのだ。そのような重要な位置にいる家長が、現実に満足し明日を考えず、一日の努力の代価を一日で蕩尽しても構わないと思ひ、ついに老年に達して、自分の財産は子供だ、と言う空しい考えは、子供から虐待されればそのとき後悔しても遅いのだ。

夫が物事の取り扱いを間違えると、一人だけが滅びるだけでなく妻にまで苦勞させることになり、一人で先にあの世に行ってしまうと、従う人はどうなるのか……？女の一生は男の物事への対処にどの程度影響されたのかを考えてみる……だが昔と比べると今の男女の職業と生活力は、強い女子がいるので違っていると言うが、関連はあり、男も女も一生を生きて行くには苦しい道を限りなく歩かなくてはならないのは、現世での罪を償う道なのだろう……。

10年経てば山河は変わるが

10年振りに友人の子息に会った。本当に久し振りだ。だが40半ばの友人の子息は10年前と変わったところはないようだった。ところで10年前に見た友人の孫は10歳にしかなくなっていなかったが、20代の軍人になっていて、分からないくらいに変わっていた。そして子息の嫁が変わっていた。ちょうど30を過ぎたときと、10年後の今との変わったところは、中年婦人になったのを感じさせられたことだ。10年は長くない歳月だ。10年と言えば山河が変わると言うが、都市の巷間の変遷を言うのであって山河ではない。山河は明らかに10年前と変わっていない。最も激しく変わるのは人の心だ。行くほどに変わるものは、時間が流れるにつれ色褪せていく人の心なのだ。

そして人々の顔が新しくなっているが、長い長い歳月に顔はなくなり、すべて板が変わって、行為が変わり、礼儀が変遷して洋式になり、従来の形式から抜け出している。古いことが新しいことに変わっても、中枢的な骨ぐらひは痕跡が残らなくてはならないのではないかと……？

教皇のことを知ろう

教皇はローマ教会の主教、ペトロの後継者、主教団の長、キリストの代理者、普遍教会の最高牧師、西方教会の総主教、イタリアの首席主教、ローマ管区の管区長、神の僕達の僕、と呼ばれる。これは教皇の役割を物語ってくれる呼称

だ。教皇はまた世界10億のカトリック信者達の霊魂的指導者であり父である。勿論世界的に言えば、172ヶ国と外交関係にあるバチカン市国の首長でもある。教皇は1059年以来枢機卿達によって推戴された。1996年改正された規定によれば、80歳以下の枢機卿達の選挙で3分の2の得票で選出されているが、現在全世界155名の枢機卿のうち80歳以下の教皇選挙権者は111名だ。教皇は初世紀だけだが自分の名前をそのまま使用した。

だが533年に選出されたメルクリオ教皇は世俗の雰囲気醸す自分の名前をヨハネス2世(56代)と改名し、それ以後は新しい教皇は種々洗礼のときの自分の名前を変えた。この慣習により、教皇が選出されると枢機卿の議長は教皇に、どんな名前呼びますか、と慣例通り聞くことになる。教皇の中にはボニファティウス6世(112代)のように10日間で亡くなった方もある。教皇として選出されたが、教皇の座に即位することが出来ず、3日間で逝去し、教皇年代記から除かれた人物もいる。アビニョン流配の時期には対立教皇も大勢いた。在任期間中に辞任した教皇もあり、外部政治勢力によって教皇職を去った人もいた。また、教皇の座から退いたが再び推戴され、3回教皇職に上ったベネディクトス9世(145、147、150代)のような方もいる。それで教皇は現在のヨハンパウロ2世に至るまで246代だが、実際の人数としては262名のわけだ。この中、先人班列に入る教皇は80名で、僕者は8名だ。全世界に散在している教会一致の標識である教皇は、信者達の信仰を堅固にするために、教え、聖化し、治める職務を遂行する。(カトリック大学 ガブリエル)

雨風の音で眠りから覚めて

眠りから覚めて壁のデジタル時計を見ると2時だった。風の音が騒々しい。夜は静かなことを望む.....昼の生業で疲れたのを夜には癒さなくてはならないのに、こんなに騒々しくては私のような人間でも眠りが覚めて、決して良い現象ではない。私は起き出して窓を明けてみる。雨が土砂降りだ。

昨晩は10時に就寝し4時間寝ていたもので、この程度なら十分だと思ってスタンドの灯をつけた。机の前に座って考える。6月12日109次IOC総会記念の記念切手を日本の友人に送ってやろうと買って置いて、まだ送っていないことを思い出す。思い出したとき送ってやろう.....とコンピューターをつけた。編集機に文章を書くので、日本語で書かなくてはならない。ペンで書いていたのをコンピューターで書き出してから半年になる。今ではペンで書くと字が綺麗でないし、時代に後れているような気分になり、印刷体でなくてはならないという考えるに至っている。

日本語の打字はハングルの打字と比べると遅く、まだ慣れていないので骨が折れる。1時間打っていると頭が痛い.....無理してはいけない.....!と私はまだ半分も書いてないがalt+sを押して貯蔵しておき、もう一度寝床に入る。2時間は眠ったかな.....?

6時ラジオニュースが聞こえる。起き上がって、書いていた手紙を続けよう

とコンピューターをONにしたが、今はこの文章の方が気になる。私がこんな文章を毎日書いて掲示板に上げることは正に我が元老人達に挨拶する手続きなのだ。今日も一日雨が降ろうが降るまいが、健康で楽しい気持ちで、無事に価値ある人生の連続を最後まで維持しようと願っているのだ。

南柯の夢

夢のような世の中……。

唐の徳宗（780～804）のとき広陵と言うところに淳于という男がいた。家の南側にとっても大きな槐の古木があったが、ある日酔ってその木の下で眠っていたところ、紫色の服を着た2人の男が現れた。「槐安国の王様の仰せでお迎えに参りました」。この男は彼等に従って槐の穴の中に入って行くととても大きな城門の前に着いた。大槐安国と黄金で書いた扁額が掛かっている。王は淳于を見ると大変喜んで婿にした。ある日、王は淳于に「南柯郡の政治が乱れているので君をそこの太守にしてやる」。淳于是友人の周弁と田子華を部下にして南柯郡に赴任した。

それから20年間、淳于是2人の友人の助けを借りて乱れた政治を正したので王は彼を宰相にした。ところで檀羅国が南柯国に徐々に侵入して来たので、淳于是周弁を将帥にして防御させたが、弁が敵を侮ったために敗北した。敵は分譲品を持って退いたが、弁は背中に腫れ物が出来て世を去った。淳于の妻も病気で死んだ。淳于が太守をやめて都に帰ってくると、彼の名声は大変なもので、権勢は日増しに大きくなり、王は内心不安になった。丁度その頃、都を移さなくてはならない兆候があるとの上奏文を差し出した者がいて、巷間ではそれは淳于の権勢が強くなったせいだという噂が広まった。

王は彼を私邸に軟禁したが、彼が無実であることを認め、故郷に帰してやった。気が付いてみると、淳于是昔のまま槐の下で眠っていた。不思議に思って槐の根を調べてみると穴があり、その穴を掘ってみると寝台が一つ入るほどの空間に蟻の群れがいる。そこが槐安国の都で、一对の大きな蟻が即ち国王夫妻だった。南側の枝（南柯）を遡ってみると蟻の群れがいる平らなところがあるが、そこが南柯郡だった。淳于是元通り穴を埋めておいたが、その日の夜大雨が降って蟻の群れは影も形もなくなった。国に変事があって遷都をしなければならぬということだった。唐の国の李公佐の「南柯記」にある話だ。

雨が夜だけ降ればよい

昨日の夜中に大雨が滝のような音を立てて眠りを覚ませしてくれた。夜中に雨が降るということは天気予報で知ってはいたが、こんなに大雨が降るとは想像もしなかった。洪水騒動が済州西帰浦で数箇所発生したと言う。しかし今日は雨は上っている。雨が夜だけ降って昼は晴れればよい。少し前に浄化槽の清掃

履行通知書を受け取っていた。7月11日～7月20日の間の施行しなければ100万ウォンの過料を納めなくてはならないと書かれている。今朝、浄化会社に施工依頼の電話をしなければならぬ.....そうしなければ過料を納めなければならぬ。影島浄化へ電話を掛けた。娘さんが受ける。施工依頼をして、万一漏れがあって100万ウォン罰金をい納めることにならないようしっかり注意願います、とひと言冗談を忘れなかった。私は郵便葉書で毎年送ってくる通知書の、不履行時の処分内容；100万ウォン以下の過料を課徴.....と言う文章が気に入らない。脅迫もあまりにひどすぎるからだ。だが理解は出来る。法律があっても話を聞かないわが国の人達は、こんな文章を書いて予め脅かしても知らない振りをして、問題になると「私は知らなかった.....」と言うかも知れないからな.....としてみる.....今日は暴風雨の後の静かな一日が続くとのことだ。太陽は雲に包まれ、雨に綺麗に洗われて、暑さも雲が遮り、従って気持ちも静かだ。今日一日の新しい希望に酔ってみよう。